



Title	飛鳥時代における仏教荘厳美術の研究：天寿国繡帳と金銅灌頂幡を中心として
Author(s)	三田， 覚之
Citation	大阪大学， 2011， 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58526
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【23】	
氏 名	み た かく ゆき 三 田 覚 之
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	第 2 4 2 9 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	飛鳥時代における仏教荘厳美術の研究—天寿国繡帳と金銅灌頂幡を中心として—
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 藤 岡 穰 （副査） 教 授 奥 平 俊 六 教 授 橋 爪 節 也

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、奈良・中宮寺伝来の天寿国繡帳と東京国立博物館所蔵の金銅灌頂幡という飛鳥時代の染織、金工を代表する作品について、技法および図像解釈や機能に関して考察をめぐらし、荘厳美術という総合的な観点から論じたものである。

第 1、2 章では、622 年に薨去した聖徳太子の往生を願って制作された、日本最古の染織品として名高い天寿国繡帳を取り上げている。天寿国繡帳は、現状では飛鳥時代の原本と鎌倉時代に制作された模本の刺繍断片が貼り交ぜられているが、特に刺繍の下地裂に注目することにより可能な限りの復元作業を試み、またその図像解釈を行った。まず、下地裂については、紫下地の区画の上辺に白下地の区画を設けていたことが判明した。また、下地裂の経緯の織糸方向により刺繍断片の向きを修正したうえで各図様に検討を加えると、白下地の区画は、老人が墓室に向かう場面などから『弥勒大成仏経』（弥勒下生経）に基づく可能性が高く、一方、紫下地の区画にはそれに対応する浄土として、『太子曼荼羅講式』

（1275 年撰）などの「四重宮殿」が中心に表されていたとの記述も勘案すると、『弥勒上生兜率天経』（弥勒上生经）所説の兜率天が表されていた可能性が考えられた。また、紫下地の区画には全面にわたり、亀形 1 つに 4 字ずつを納めた 400 字からなる銘文があったが、宝相華や鳳凰の文様とともに亀形の配置間隔を想定し、全体の復元図を新たに提示した。

第 3 章では、法隆寺献納宝物中の刺繍残片について検討した。技法のうえでは天寿国繡帳と類似すること、刺繍に用いたモール状の金銀糸は、芯となる糸が残る残片としては我が国最古のものであることを認め、図様の復元の結果、円環状の雲気文や獅咽文などの存在を明らかにした。また、この図様は第 4 章でとりあげる金銅灌頂幡と類似することから、この残片が天寿国繡帳と金銅灌頂幡との中間に位置付けられるものであることを指摘した。

第 4 章では、法隆寺献納宝物金銅灌頂幡について、その造立典拠を明らかにし、制作背景を考察した。造立典拠は、『日本書紀』や資財帳などにみえる灌頂幡が護国や天皇の往生祈願を目的に制作されていること、現存する灌頂幡の 10 メートルを超す法量などから、灌頂幡が義浄訳『七仏薬師经』の旧訳を含む『大灌頂经』所説の幡に相当することを明らかにし、金銅灌頂幡に表された宮殿や仏菩薩、天人、鬼形などの図像が同経に基づくことを指摘した。また、金銅灌頂幡を構成する各部位の図様の違いに注目し、法隆寺金堂の再建に関わって 670 年から 7 世紀末頃にかけて漸次に制作された可能性を指摘した。

最後に第 5 章では、金銅灌頂幡の幡足であった可能性が指摘されている、かつて法隆寺に伝来した繡仏裂について考察したものである。現在は各所に分蔵されているが、それらを可能な限り再調査し、下地、刺繍の技法や図様から改めて分類し直すことにより、金銅灌頂幡の大幡、四隅小幡ならびに別具の金銅小幡に付属した幡足であった蓋然性を導き出した。また、特に図様については、金銅灌頂幡とともに法隆寺金堂の天蓋や壁画との関連を指摘し、この幡足を含む金銅灌頂幡がこの時期に法隆寺において展開した美術様式の多様性を横断面のように示す好個の作例であることを明らかにした。

論文審査の結果の要旨

本論文は、奈良・中宮寺伝来の天寿国繡帳および法隆寺献納宝物の金銅灌頂幡を中心に、飛鳥時代の工芸品を荘厳美術という視点から論じたものである。全 5 章からなる本文は 400 字詰原稿用紙に換算して約 260 頁、これに図版編および史料編が付されている。

第 1、2 章でとりあげた天寿国繡帳、第 3 章でとりあげた法隆寺伝来刺繍残片、第 5 章でとりあげた金銅灌頂幡々足については、申請者が自ら調査を実施し、デジタル・マイクロスコープにより新たに撮影した画像データに基づいて、断片と化した各作品の材質や技法を綿密に分析し、かつ図様の復元を試みていることが、まずもって大きな成果である。特に、これら刺繍作品の下地裂の織糸方向に着目し、各断片の向きを修正したうえで図様の復元を行う手法は、本論文において申請者が先鞭をつけたものであり、これによって刺繍作品の研究は新たな段階へと進展したと言って過言ではない。

さて、こうした手法を採用したうえで、第 1、2 章ではまず天寿国繡帳の一部断片の図様が弥勒関係経典により解釈できることを論証するとともに、刺繍断片の図案や配置を合理的に解釈、復元することによって、従来の説とは大きく異なる同作品の復元案を提示している。推論によらざるを得ない部分が多いとは言え、作品の実証的な分析に基づきながら、現時点において最も妥当性、蓋然性の高い解釈、復元案を提示したものと評価できる。

本論文は大部分が染織品を対象にしたものであるが、第 4 章では法隆寺献納宝物の金銅灌頂幡を取り上げている。工芸作品は、その技法の理解や判定が難しいためにジャンルごとに研究が分断される傾向があるなか、刺繍に加え、金銅製品にも果敢に取り組んだ姿勢

は高く評価できる。本論文の「荘厳美術」という視点もそれゆえに持ち得たものである。さて、第 4 章では、金銅灌頂幡について、史料や経典にみえる記述を現存する灌頂幡に照らすことにより、『大灌頂经』所説の幡に相当するとの解釈を提示した。これにより、その造立意義にはじめて焦点が当てられ、さらに制作背景や年代にまで議論が展開された。

第 3 章、第 5 章は、それぞれ着実に作品分析、図様復元、図像形式の分類といった基礎的な研究を行っている。特に第 5 章において、法隆寺に伝来した繡仏裂が金銅灌頂幡の幡足であった可能性を決定的にし、かつその図像が法隆寺金堂の天蓋や壁画とも密接に関連することを指摘した点は、法隆寺を中心にした飛鳥時代後期の美術史研究にとって大きな足跡を残したと言えよう。

ただ、そうした優れた研究成果の一方で、第 1 章については想定される弥勒浄土の表現に具体性が欠ける嫌いがあり、第 4 章の金銅灌頂幡の制作背景についても、当然予想されるべき聖徳太子信仰との関わりが論じられていないなど、まだ課題が残されていることも否定できない。もとより、「飛鳥時代の仏教荘厳美術」というテーマを掲げながら、その研究は緒に着いたばかりと言うべきかも知れない。しかし、実証的な作品研究と作品の解釈論を両立させた本論文がこれからの飛鳥時代美術の研究に裨益するところはきわめて大きい。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。